

読者のご意見を受けて

年々「わかりやすく」
「充実した」報告書との評価がUP!

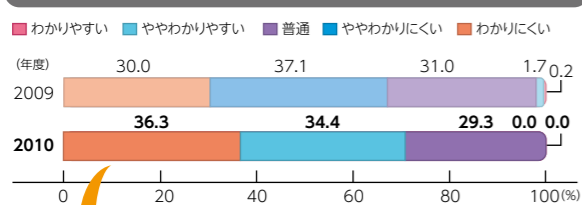
「平和堂CSR報告書2010」に対し、330名の読者よりアンケートのご回答をいただきました。「平和堂に期待されることは？」という設問に対し「より地域に根ざしたCSR活動を充実させて欲しい」との回答が多く、各店舗での活動や地域住民と連携した活動強化の必要性を再認識いたしました。

2010年版の報告書は読者の「お店や商品を通じた活動を知りたい」との声に答え、お客様や地域のページにおける活動報告を充実させました。また、特に社会貢献活動の「目標と実績」を可能な限り掲載し、より計画性と持続性をお伝えできるように努めました。さらに、環境報告ガイドラインなどに沿いながらも、全体の文字量を絞って写真を大きく入れるなどビジュアル面も強化しました。その結果、2009年度に比べて「わかりやすい」が6.3ポイント増加、「充実している」が3.3ポイント増加しました。

2011年版はさらにこれらの取り組みを強化し、「読みやすく、信頼していただける」報告書をめざしました。今後も、皆様のご意見を参考にCSR活動の強化と報告書の充実をはかってまいります。

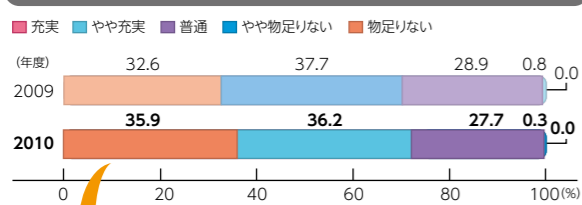
平和堂 CSR報告書2010 アンケート集計結果 (回答者数330名 内訳:社員とその家族300名、学生・お客様など30名)

わかりやすさ



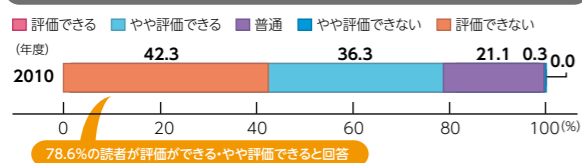
「わかりやすい」の評価が6.3ポイント向上。「ややわかりにくい」「わかりにくい」は0。70.7%の読者にわかりやすさと評価をいただいている。

内容の充実度



「充実」の評価が3.3ポイント向上。物足りないは0。

平和堂のCSR活動への評価

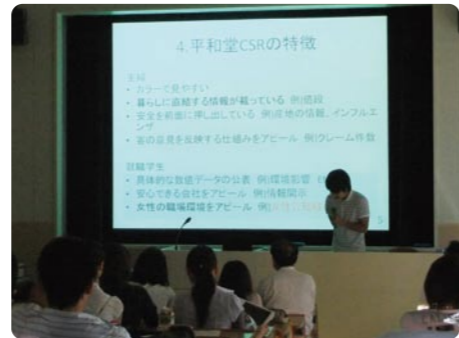


78.6%の読者が評価ができる・やや評価できると回答

学生読者のご意見を受けて

滋賀県立大学の学生さんと
報告書について意見交換しました。

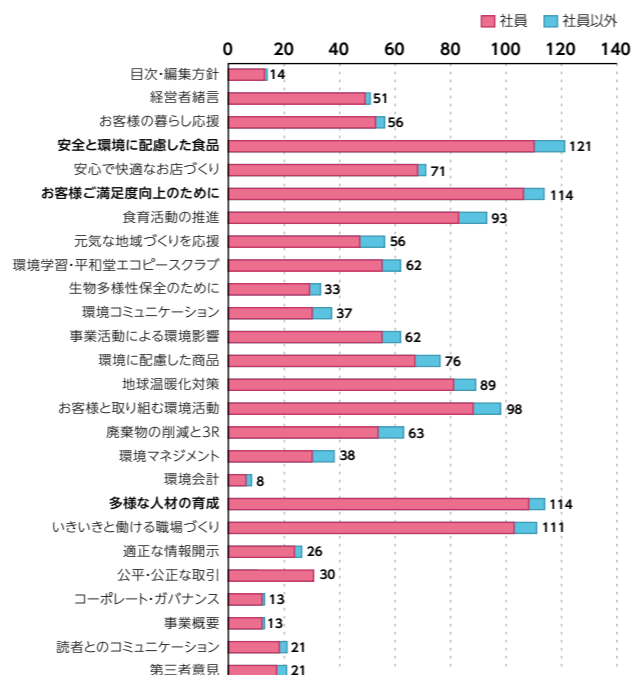
滋賀県立大学「環境マネジメント演習」(2010年6月16日)において、環境科学部環境政策・計画学科の学生約40名に平和堂CSR報告書と他社の報告書を比較し、改善提案をしていただきました。「各活動について今後の方針を明確にすべき」「読者アンケートの回答者が少ない」「女性管理職の育成スピードが遅い」などの指摘をいただきました。また、「報告書のデザイン性を向上すべき(おしゃれに)」といった学生さんならではの意見もいただきました。いただいたご指摘・ご意見は2011年版の制作や活動の参考にさせていただきます。今後もこのような交流を通じて、より地域に根ざしたCSR活動を推進してまいります。



滋賀県立大学の学生による発表

印象に残った、または興味を持たれた内容

- (2010年度) ベスト3
1. 安全と環境に配慮した商品 (121)
 2. お客様ご満足度向上のために (114)
 3. 多様な人材の育成 (114)



滋賀県立大学 学長補佐
土屋 正春

早稲田大学大学院修了。1995年滋賀県立大学開学とともに環境科学部教授に就任。同学部長、副学長を経て、2006年より同大学理事、2009年より現職。専門は環境法、環境政策学。なお、2008年度より水資源・環境学会会長。環境とまちづくり、環境消費行動を研究テーマとし、千里リサイクルプラザ市民研究所、滋賀グリーン購入ネットワークなど、わが国の環境市民活動における代表的な組織を設立。

読みやすさと分かりやすさ

昨年発行された2010年版では経済情勢の低迷が背景にあり、生活防衛への支援体制を築くための具体的な努力からページが始まっていました。今号ではその様子は一段落し、読みやすさと分かりやすさの努力が表立った編集になっています。

分かりやすさの要因は、なによりも記述が具体的で数値を伴うことの徹底にあります。ここまでの努力は他のCSR報告書には少なく、この報告書ではどのページ、どの項目を読んでも具体的な表現努力は一貫していて、逆にこのための編集作業の大変さが察せられます。この努力はぜひとも継続していただきたいものです。

この他の要因としては、見出しに続いて大きな文字で要約があること、前号でのお願いに応じていただき多くの項目で今年度の目標がページ下に統一して記載されていることがあります。この二つを合わせ見ることによって企業としての考え方を整理よく理解できるようになりました。こうした表現方法は一般的な方向として他にも普及するに違いありません。

他方で、文章量が多く一般的な読者には読み続けるのが容易ではない部分もあり、ホームページによる情報提供との組み合わせを考える時期なのでしょう。

第三者意見を受けて

「平和堂CSR報告書2011」は、今回で12回目の発行となりました。

本報告書で、読みやすさや報告内容を簡単に知っていただくために、今回工夫しました点について一定の評価をいただき、今後も編集方法のポイントとして、継続実施してまいります。さらに「信頼のトライアングル」についても一層の充実を図るべく改善取り組みを進め、信頼性の向上に努めます。また、「平和堂ホームサポートサービス」を始めとした地域貢献などの新しい取り組みについて、地域の皆様とのコミュニケーションを深め、よりよい活動となり、その結果を報告できるように進めてまいります。

今後も各ステークホルダーの皆様とのコミュニケーションを重視し、社会に必要とされる充実したCSR活動となるように推進してまいります。

一層の信頼性向上を

前号で強くお願いしました「信頼のトライアングル」構想については、たとえば取引先のアンケート調査結果とその分析が公表されるなど双方向性の具体的な姿が初めて示され、業界を通じて例の少ない構成が実現しています。同様に自社開発による「作り手の顔が見える安全な商品」の考え方も、平和堂が仕切り役を務めることでのトライアングル強化の現れで、これらの信頼性向上への姿勢は平和堂CSRの特徴として定着することが期待されます。

この点では、大型化する複合店舗では個別の専門店側と環境保護のための基本的な取り決めを結ぶなども考えるべきことかも知れません。

一方、高齢化や近所つきあいの希薄化などスーパーマーケットをめぐる社会環境は大きく変化しています。地域貢献実験事業として「お買い物のお手伝い」に着手したことは想定する対象が社会的な弱者ですから、次号ではこの有意義な実験を通じて把握された課題などが地域の読者と共有できることを願うものです。読者を啓発するものこうした報告書の大切な役割だと考えるためです。

これまでとこれから

この報告書は2000年度版から発行が始まったとのこと。当時はそれぞれの企業が自らの活動を「社会貢献」という観点から整理し公表するという自体が例の少ない時期でした。環境省がこうした報告のあり方についてのガイドラインを策定したのが2001年のことですから、平和堂の社会的責任をめぐる考え方がまだ手探り状態で始められたことがわかります。県民一般の日々の生活を支える小売業にこうした姿勢がいち早く芽生えたことはとても心強いことと言えます。

これで報告書は1ダースがそろったこととなります。平和堂にとっての社会貢献をどう見通すのか、次号では大まかでもよいので将来計画なり考え方を示しただけのものを期待いたします。

専務取締役 管理本部長
古川 幸一

